

戸建住宅の 色彩動向に 関する研究

A Survey on Color Trend of
Detached House



CD 研究所
第2研究部
渡辺昌紀
Masaki
Watanabe



CD 研究所
第2研究部
石原麻子
Asako
Ishihara



CD 研究所
第2研究部
宮川理香
Rika
Miyagawa



CD 研究所
第2研究部
西本 悟
Satoru
Nishimoto

1. はじめに

高齢化社会から本格的な高齢社会への突入や都心回帰現象などの社会の動きに見られるように、人々のライフスタイルに大きな変化が起っている。団塊の世代がリタイア後に郊外の自宅を賃貸し、利便性の高い都心の住宅を「終の棲家」として購入するケースや、バブル崩壊後の地価の下落、企業の遊休地放出などによる住宅の供給過剰を追い風に、ライフステージの変化を迎える30代をコアとしたシングル&カップル層が都心に居を構えるケースが増えている。

近年、このライフスタイルの変化によって戸建住宅のデザインが大きく様変わりしている。また、都心部での地域景観における建物の色を巡る紛争が全国的に話題になるなど、自分の住む地域を美しくしようという住民意識が色に反映されるのをしばしば経験している。

一方、我々としても色彩提案を行う上で、戸建住宅の色彩動向を適時に把握することは非常に重要である。そこで、戸建住宅の色彩動向について、1999年度から(財)日本色彩研究所に調査を委嘱してきた。今般2006年度(3回目)の調査結果が得られたので、これまでの調査結果をまとめ、近年のライフスタイルの変遷と照らし合わせながら色彩動向を解析しその要因について考察した。

2. 調査目的

この十数年の間にガーデニングが流行するようになり、その流行を受けて南欧風を初めとする諸外国の住宅デザインが提案されるなど住宅デザインの目まぐるしい動きが見られている。住宅メーカー各社の顧客獲得の為の戦略によるところもあるが、インターネットなどにより様々な情報が瞬時に手に入る時代になって、顧客のライフスタイルの多様化とともに多くの商品寿命が短サイクル化していることにもよる。

本調査研究では、住宅メーカーの狙いや顧客ニーズの動向を把握するために、これらが顕著に現れる住宅展示場におけるモデルハウスの外装デザインの主な部位の色を調査した。

3. 調査概要

戸建住宅を以下の三つの部位に分類し、それぞれの部位の色を調べた。吹き付けタイルや弾性塗料、塗装意匠仕上げなどの塗料仕上げと、磁器タイルやレンガなど塗料以外の仕上げ材の区別は行わなかった。

- 1) 主 壁
妻壁、側壁や平側の大きな面積を占める壁
- 2) アクセント壁
ベランダ壁・飾り壁・玄関周りの壁など面積は小さいが、デザイン的にアクセントになる壁
- 3) 玄関扉

3.1 調査日

2006年6月29日に現地調査した。調査は測色及び写真撮影の条件がよい午前10時から午後3時の間で行った。

3.2 調査場所と調査戸数

神奈川県横浜市西区西平沼町6-1に所在する住宅展示場「TVKハウジングプラザ横浜」の内に展示されているモデルハウスを調査した。調査は全62戸中、前回の調査(2002年)以降の新築34戸を対象とした。

3.3 測色方法

建物外装色をJIS標準色票によって視感測色した。測色は主壁面、アクセント壁面および玄関扉の色を中心に行い、それ以外の部位は必要に応じて測色した。

4. 調査結果と解析

以下で今回の調査結果と1999年度(調査戸数:新築36戸)、2002年度(調査戸数:新築28戸)の調査結果を総合して解析した。

4.1 外壁塗り分けパターン

図1では、戸建住宅の外装デザインを配色により図2の4つの塗り分けパターンに分類し、その出現比率を示した。

1) 単色パターン

壁面の色が単一のパターンである。このパターンの出現率は38.2%であり、2002年度以降急激に減少しており、1999年度に比べると半減している。

2) 上下塗り分けパターン

建物の1階2階で壁面の色が異なるパターンである。その出現率は17.6%であり、1999年以降減少している。

3) 等面積塗り分けパターン

建物の壁面を等面積で色分けするパターンである。前回の調査で初めて出現したものであるが今回の出現率は0%であった。

4) パーツ別色分けパターン

建物を単純な方形パーツの組み合わせと考え、その方形パーツの境で壁面の色を変えているパターンである。今回の調査で初めて出現したもので、出現率は44.1%であった。

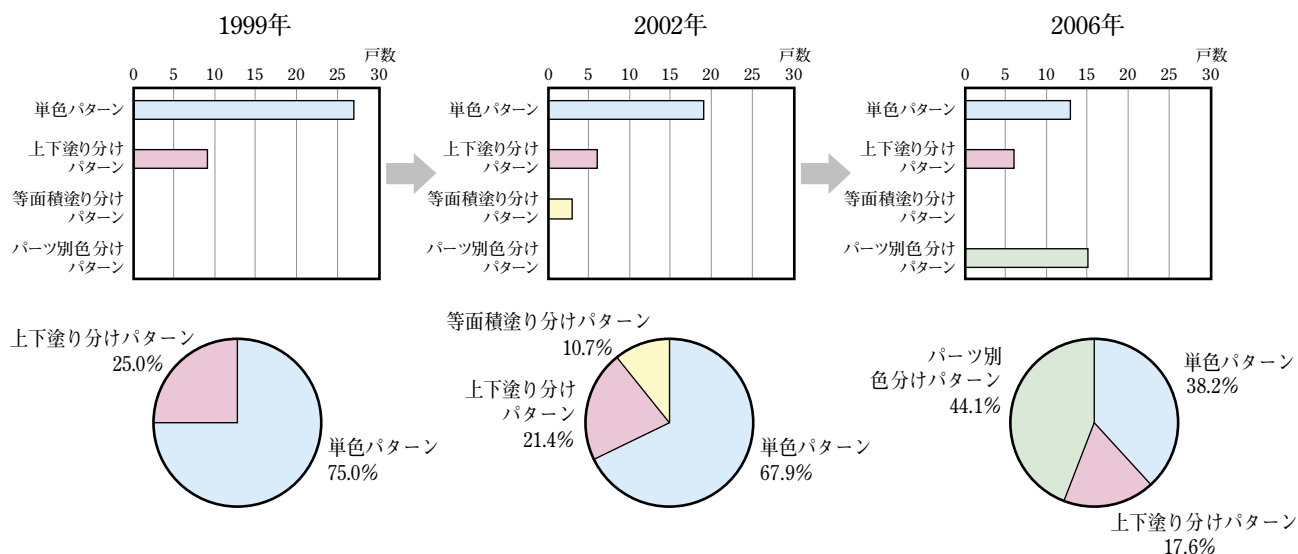


図1 外壁塗り分けパターンの分類



和洋折衷タイプ（塗り分け：単色パターン）



洋風タイプ（塗り分け：上下塗り分けパターン）



洋風タイプ（塗り分け：等面積塗り分けパターン）



モダンタイプ（塗り分け：パーツ別色分けパターン）

図2 戸建住宅のデザインのタイプ

4.2 主壁面の色彩

4.2.1 色相、明度、彩度による分類

図3に色彩の3属性である色相、明度、彩度で分類して示した。プロットの色は調査年度、数は出現度数を示している。

色相はいずれの年もY R(黄赤)およびY(黄)に集中した。しかし、今回は過去の調査では出現していなかったB(青)系の色が1件、R(赤)系の色が1件出現した。

明度、彩度に関しては、1999年度に低彩度の白い主壁色が多く出現したのに対し、2002年度は彩度が高い色が増えた。2006年度は高彩度化が進む一方、低彩度高明度のいわゆる白い主壁が復活した。

4.2.2 明度による分類

図4は主壁面の色を明度で分類したものである。

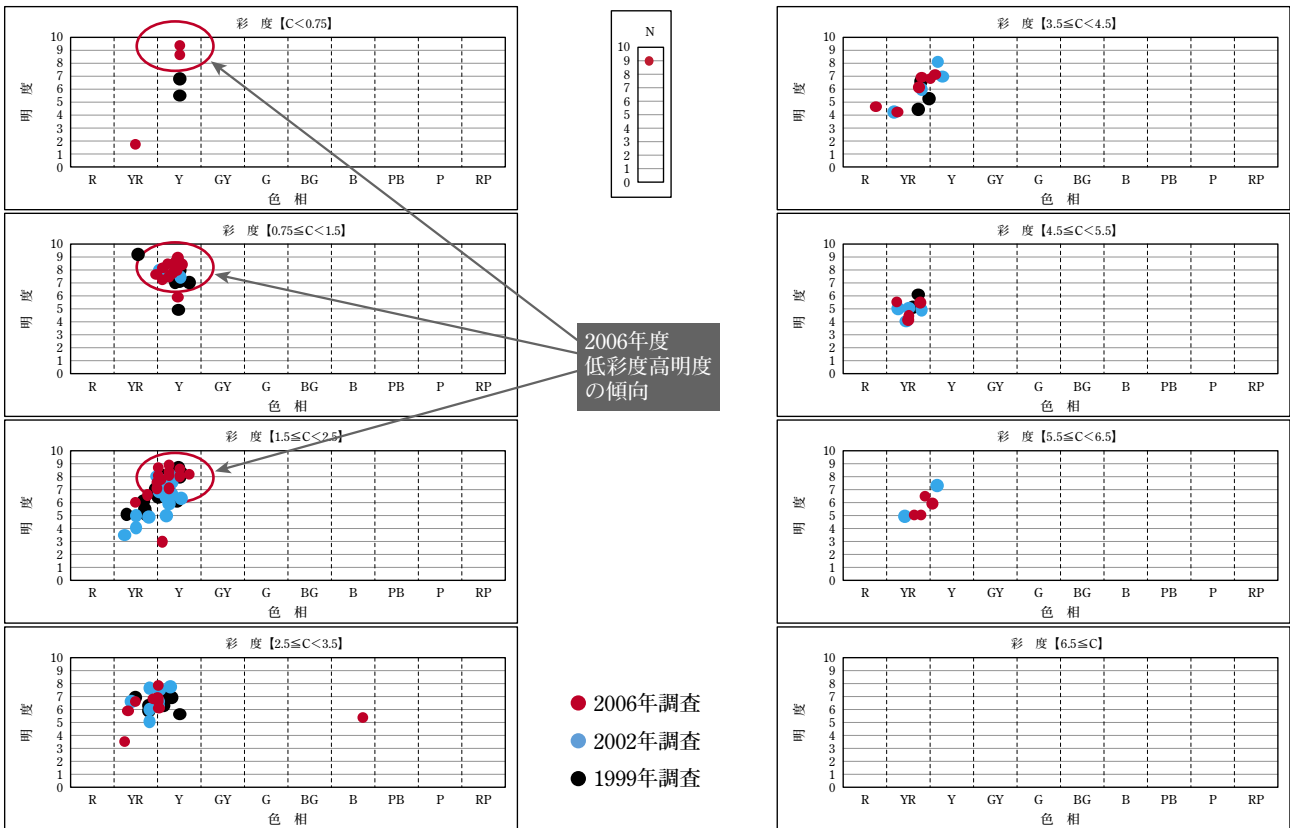


図3 主壁面の色彩の分類（色相、明度、彩度による分類）

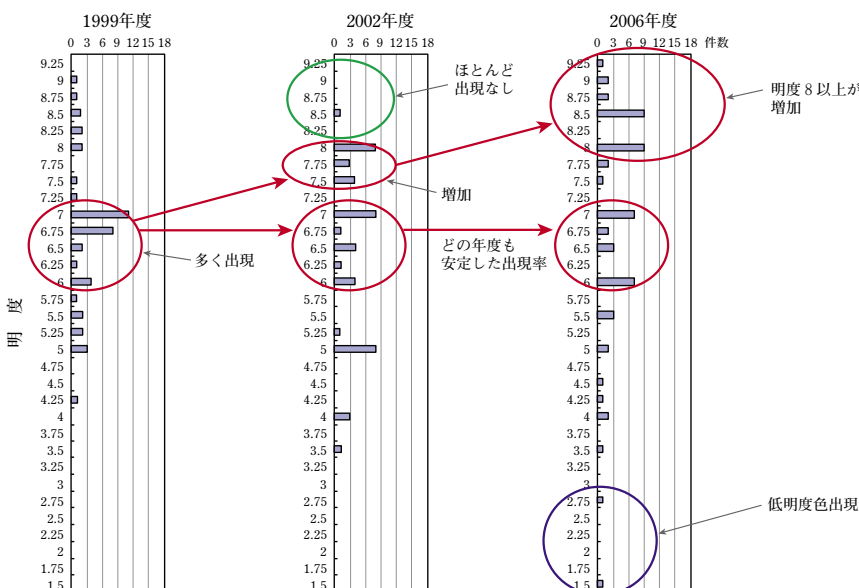


図4 主壁面の明度の変遷

1999年度は、明度7を中心とした中明度の色が最も多く出現した。2002年度は、明度8.25から明度4の間に広く平均して分布し、2006年度は明度8以上の高明度色が多く出現する一方で、明度3以下の低明度色も出現した。

なお明度が6～7はいずれの年度も一定の出現率を示しており、外装色の主要な明度域になっている。

4.2.3 彩度による分類

図5は主壁面の色を彩度で分類したものである。

1999年度は、彩度1～2の低彩度色と、彩度2～3の中彩度色が多く出現した。2002年度は、低彩度色が減

少し、彩度2～3.5の中彩度色が増加した。中でも彩度2が突出し、彩度5.5や6といった1999年度には出現していない高彩度色も出現した。今回の調査では、2002年度に減少した彩度2未満の色が再び多く出現した。逆に彩度2が大幅に減少し、変わって高彩度色が増加した。即ち、中彩度域に集中した前回とは異なり、低彩度から高彩度まで幅広い色域に分布しており、多彩化の傾向が見られた。

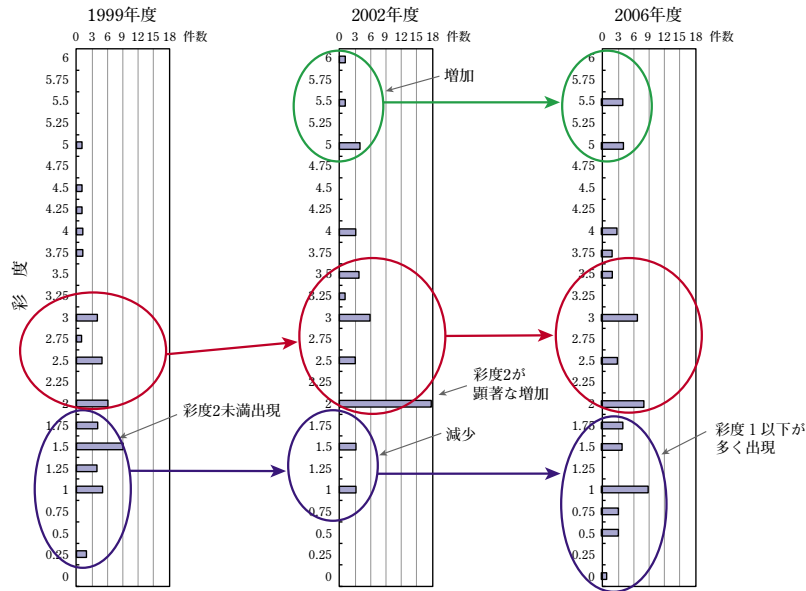


図5 主壁面の彩度の変遷

4.3 アクセント壁面の色彩

図6に1999年以降の調査結果をまとめた。

色相は主壁同様YR～Yが中心で、大きな経年変化は見られないが、明度、彩度はいずれも色域が広がる傾向があり外装色が多様化しているのが判る。

4.4 玄関扉の色彩

図7も同様に玄関扉の色彩をプロットしたものである。色相的には壁色と同様にYR～Y集中しているが、彩度はかなり高い色も出現している。特に今回の調査では彩度1程度の低彩度域と、彩度5.5以上の高彩度域に二極化した。いずれも木製扉をイメージさせる色彩が多い。扉材質は全34戸中30戸が木または金属を使っていたが、4戸が透明ガラス一枚板であった。

5. 考察

戸建住宅の外観デザインは大別すると和洋折衷タイプ、洋風タイプ、モダンタイプがある。そしてその塗り分けパターンは概ね上記の4パターンに分類することができ

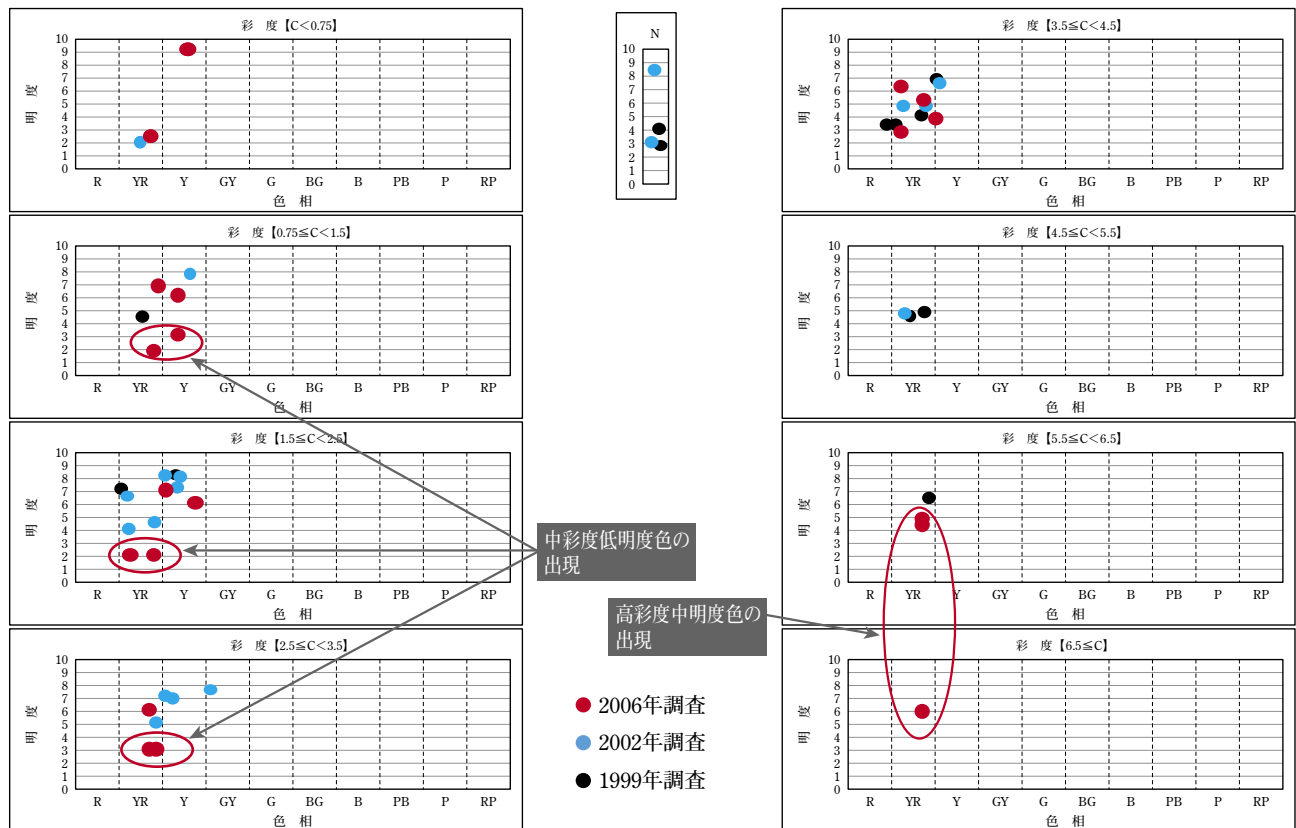


図6 アクセント壁面の色彩の分類（色相、明度、彩度による分類）

る(図2参照)。以下では、塗り分けパターンや各部位の配色の観点から住宅のデザイン動向を解析し、ライフスタイルとの関連や他の要因について考察した。

5.1 外壁塗り分けパターン

1999年度には土や木など自然素材をイメージさせるシックやナチュラルな色が似合う和洋折衷タイプの外観形状が主流であった。図1からわかるように、外装色は単色パターンが75%、上下塗り分けパターンが25%で、塗り分ける色のコントラストは強い配色が主流であった。2002年度にはカジュアルもしくは風格のある洋風タイプの外観形状の住宅が多く、塗り分けパターンは単色パターンと上下塗り分けパターンが多く出現した。上下塗り分けパターンには色だけでなく素材やテクスチャによってコントラストを付けたものもあった。そして、今回の調査ではシャープな印象のモダンタイプが多く出現し、パーツ別色分けパターンの塗り分けパターンが急増した。この外壁をパーツごとに塗り分けるには必然的に住宅がパーツで構成されている必要がある。これは箱を組み合わせたような構造の戸建住宅が開発され、住宅メーカーより、それにあった配色提案がなされたためと思われる。同年度に出現した従来からの和洋折衷タイプや洋風タイプの住宅は単色パターンとコントラストの強い配色もしくは弱い配色による上下塗り分けパターンが多かった。

5.2 主壁面の色彩

1999年度は彩度5.5～6.5の色は出現しておらず、高彩度域となる色の出現率は少ない。むしろ低、中彩度中明度が多くクリーム・ベージュ系のシックやナチュラルな色に集中した。5.1で述べたシックやナチュラルな色の和洋折衷タイプの住宅は、この年度の前後に流行したエコロジーブームを受けて数多く出現したと考えられる。

これに対して2002年度は中明度中彩度のオレンジ・イエロー系のカジュアルな色が多く出現した。また、1999年には無かった彩度5.5～6.5の高彩度色が出現した。この年の前後のカジュアルな南欧風デザインの流行を反映したものと考えられる。今回の出現色の分布も2002年度に似ているが、低彩度域で高明度のいわゆる白壁への回帰傾向も見られた。これは先述したモダンタイプの外観の流行を受けてホワイト～オフホワイト系の色が増加した現象である。また、もう一つの傾向として高彩度中明度色も増加した。これらの色はアースカラーと言われる色で、主に窯業系サイディングや砂岩やレンガ調のタイルの色であった。

エコロジーブームからガーデニングブームへと、この十数年来継続している自然回帰願望が、住宅デザインに対する顧客ニーズとして依然、根強く残っているものと思われる。

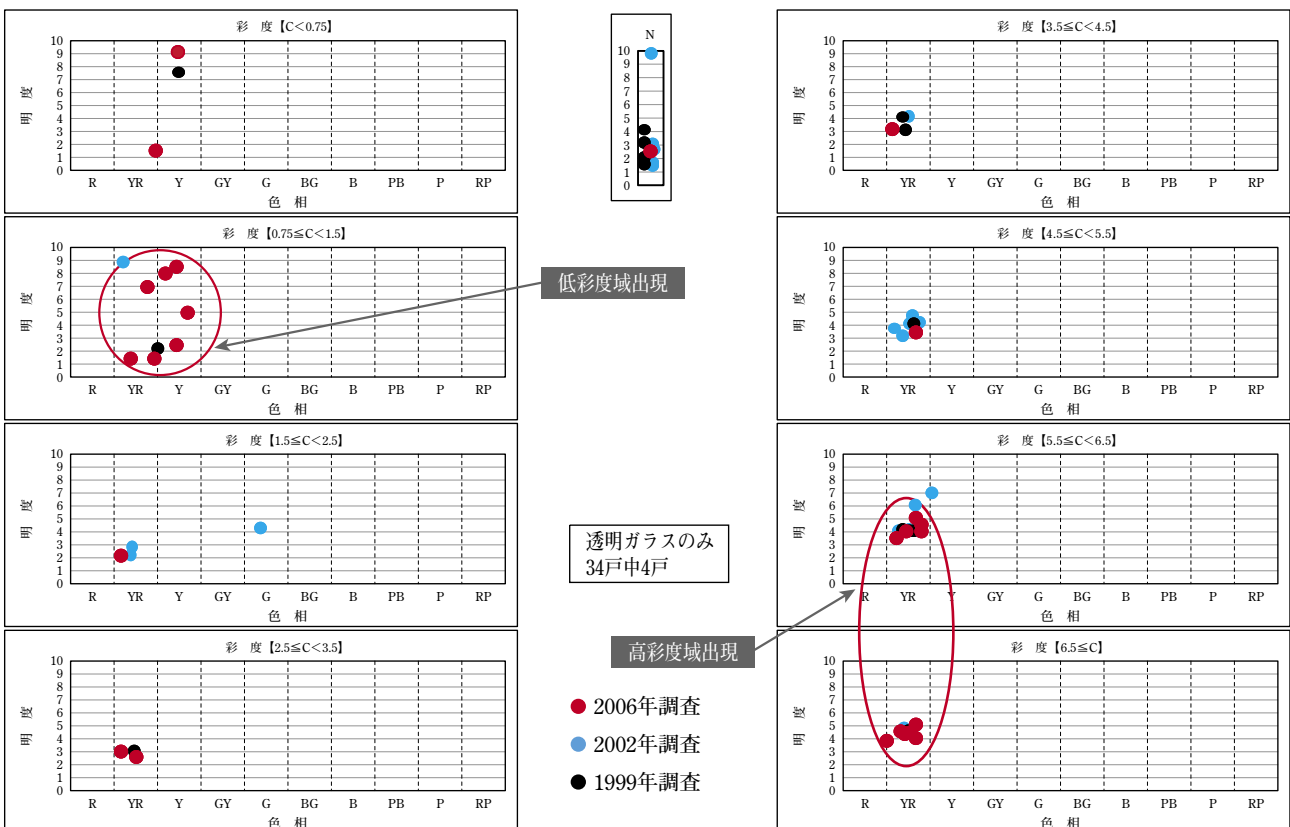


図7 玄関扉の色彩の分類（色相、明度、彩度による分類）

5.3 アクセント壁と玄関扉の色彩

アクセントカラーは、主体色に対して色相や明度、彩度を変えるのが一般的である。しかし、今回の調査結果が示すように、戸建住宅の外装に使われる色は、主壁、アクセント壁、扉など、部位に関わりなく、YR~Yの色相が多い。従って明度と彩度もしくはトーンで変化を付けている配色が多い。専門的に言えば、同一色相あるいは類似色相配色が主体になっていることが判る。明度や彩度あるいは明度と彩度で決定されるトーンのコントラストの強さは、各住宅メーカーのデザインコンセプトによってそれぞれ異なってくる。今回の調査ではこれらのアクセントカラーの色域がかなり広がっていることが知られた。特に高彩度化が顕著で、これは住宅外装デザインの多様化を表している。

以上、住宅外装の各部位の色彩動向をもとに住宅デザインの変遷について解析し、ライフスタイルやその他の要因との関連について考察した。

住宅のデザインはライフスタイルや建築技術の進歩に伴う形状（構造）の変化と強く関連している。そして、優れたデザインはいつまでも残り、時代の流れに則しながら延々と生き続けている。1999年度の調査時に流行したエコロジーはもはや流行のライフスタイルではなくスタンダードとなり、当時のデザインの一部はくつろぎを感じる自然な素材感やテクスチャーを活かした内外装として現在も見られる。

また、2002年度のガーデニングなどで癒しを求めたライフスタイルからは、手作り感のある意匠外壁を持つ南欧風デザインが生まれ、その明るい空間創造の要素は現在のシンプルモダンデザインに引き継がれている。

一方、透明ガラス一枚板の玄関扉の出現は、シンプルモダンデザインにおいて、リビングに面する開口部を大きなガラス窓にして外部と内部の空間とに連続性を持たせ、都会の狭い立地面積の中で手狭感を払拭するのと同様の考えから出現したものと思われる。これは間仕切りのない大きな室内空間や全フロアの床に共通したタイルを敷くことで室内を一つの空間とする内装の手法でも見られる。更に、これまで店舗等で見られてきた透明ガラス一枚板の玄関扉が戸建住宅に使われたことは、「ショッピングの場という店舗」の非日常的空間が「住まい」という日常的空間に取り込まれた現象といえる。非日常的空間が日常的空間に入り込む現象は、南欧風レストランなどで使われていた色、質感、装飾がそのまま戸建住宅や集合住宅に取り入れられた南欧風デザインで既に現れている。そして、シンプルモダンデザインはその非日常的な傾向を更に推し進めた印象を受ける。それは携帯電話がかかった瞬間に、公的空間の如何に関わらず受信した者にとってその場所が私的空間に変じたり、インターネット通販の普及により私室が瞬時にショッピングの場に変じるといった生活環境、あるいはライフスタイルの変化とリンクしているであろう。

6. おわりに

景観を構成する主要素の一つとして戸建住宅を捉え、そのデザイン動向に着目し調査を行ってきた。上記したように戸建住宅のデザインは、その時代のライフスタイルと強くリンクしており、実際の色彩動向と同時にこれらに関する調査も重要である。特に昨今は非日常的空間と日常的空間が曖昧に、あるいは融合してきており大きなライフスタイルの変化が予想される。今後も双方の調査を継続する予定である。

参考文献

- 1) 辻 公衛、山田順一、木村真理子、速水久夫、井上理香：塗料の研究、115、38-44（1988）